

2009年6月12日

報道関係各位

国立大学法人東京学芸大学  
日本イーライリリー株式会社

首都圏の公立中学校を対象とした、メンタルヘルスの現状とその教育の実態調査より  
**心の健康状態に問題を持つ生徒がいる学校は99%**  
～メンタルヘルス教育「必要」、映像教材・指導書などの支援求める声多く～

国立大学法人東京学芸大学(東京都小金井市、学長:鷲山恭彦)、ならびに製薬企業日本イーライリリー株式会社(本社:兵庫県神戸市、代表執行役社長 アルフォンソ G. ズルエッタ)は、「こころの病気を学ぶ授業(うつ病編)の開発」に関する共同研究を行っております。共同研究の一貫として、思春期から青年期に発症することが多いといわれる「うつ病」などの精神疾患に関し、中学生のメンタルヘルスの現状と課題、及び学校現場でのメンタルヘルス教育の現状と課題を把握することを目的に、2008年11月～12月、首都圏の公立中学校を対象に、「こころの病気を学ぶ授業プログラムの開発に関する調査研究」を実施いたしました。(調査対象 507校、うち有効回答 163校)。この度、この調査結果がまとまりましたのでお知らせいたします。

主な調査結果は以下の通りです。

**【中学生のメンタルヘルスの実態】**

こころの健康状態に問題を持つ生徒がいると回答した中学校は全体の98.7%  
精神医療専門機関を受診する生徒がいる学校83.9%、うつ病の生徒がいる学校37.3%  
半数以上(53.1%)の学校で、心の健康状態に問題を持つ生徒が「増えている」  
半数近く(46.5%)の回答者が「過去3年間に自殺の悩みを相談された」経験がある

**【メンタルヘルス教育の実施状況】**

「こころの病気」を扱う授業を実施している学校は3割(30.4%)にとどまる  
8割以上(82.6%)が「こころの病気」を学校の授業で扱う必要性を認識。とりあげたい疾患は、「薬物依存症」、「うつ病」、「摂食障害」、「アルコール依存症」。  
うつ病について「教える知識や情報ない」、「どう教えたらよいかわからない」  
うつ病授業、取り上げたい内容は「予防法」、授業に必要なものは「映像教材」など

詳細は添付の調査概要をご参照ください。

今回の調査の結果、調査に回答したほぼ全ての中学校に心の健康状態に何らかの問題を持つ生徒がおり、そのような生徒が増えている傾向があるということがわかりました。このような状況のなか、多くの教師がメンタルヘルス教育の必要性を認識しているにも関わらず、教える知識や情報、ノウハウの不足などから、メンタルヘルス教育を実施している学校は約3割にとどまることが明らかになりました。特に「うつ病」は、薬物依存と並び現場のニーズの高いテーマでした。

中学生、高校生といった思春期は、人間関係の変化や受験、自己の確立など、様々な場面で悩みをもつことが多く、心の健康状態に悪い状況が起きてしまいやすい時期です。こころの病気を正しく理解することは、病気の予防や適切な対処という意味において重要であり、そのためにも学校教育にメンタルヘルス教育が取り入れられることが多方面から望まれています。

本研究は、日本イーライリリー株式会社が、社会貢献活動の一つとして取り組む「こころの病気を学ぶ授業」プログラム(指導案・教材など)の第二弾となる「うつ病編」の開発にあたり、同プログラム開発の趣旨に賛同する東京学芸大学と共同して取り組むものです。東京学芸大学と日本イーライリリー株式会社は、本調査により、学校現場におけるメンタルヘルスの実情およびニーズを把握し、調査結果を活かした授業プログラムの開発に着手しており、完成後、学校現場への提供を行う予定です。

以上

本プレスリリースに関するお問い合わせ先  
日本イーライリリー株式会社 渉外企画部 小嶋・渡辺  
TEL 078-242-9271 / E.Mail: kojima\_yoshiko@lilly.com

**「こころの病気を学ぶ授業」共同研究プロジェクト**  
**こころの病気を学ぶ授業プログラムの開発に関する調査研究**  
**概要**

調査実施時期 : 2008年11月17日～2009年6月4日

調査対象校 : 東京都西部、埼玉県南部、神奈川県北部の47市町村のすべての公立中学校  
 (507校)

有効回答数 : 163校(回収率32.1%)(2009年6月4日現在)

調査方法 : 郵送による無記名調査

調査目的 : 学校現場のニーズにあった教材開発の指針を得るために以下の2点を明らかにすること。

うつ病および抑うつ状態を中心とした生徒のメンタルヘルスの現状と課題

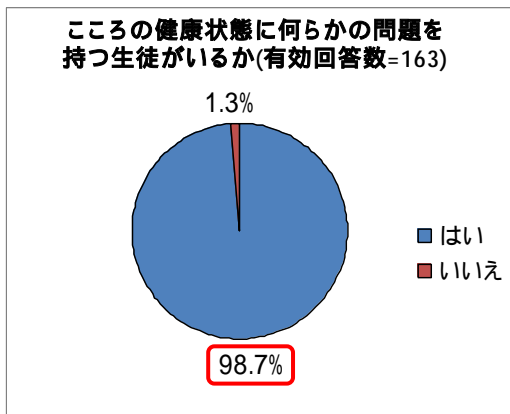
学校現場におけるこころの病気に関する授業(メンタルヘルス教育)の現状と課題

回答者 : 養護教諭 92.5%、現任校での勤続年数平均は3.6年

**主な調査結果**

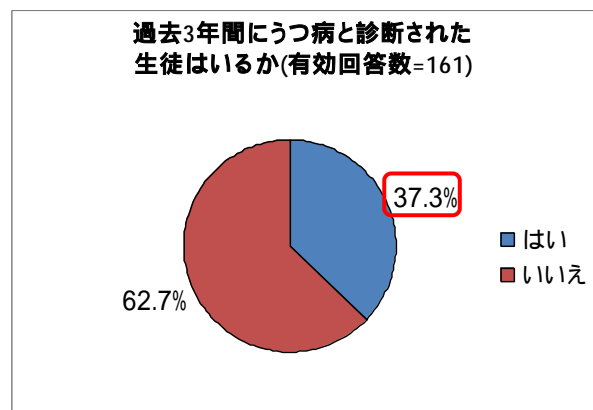
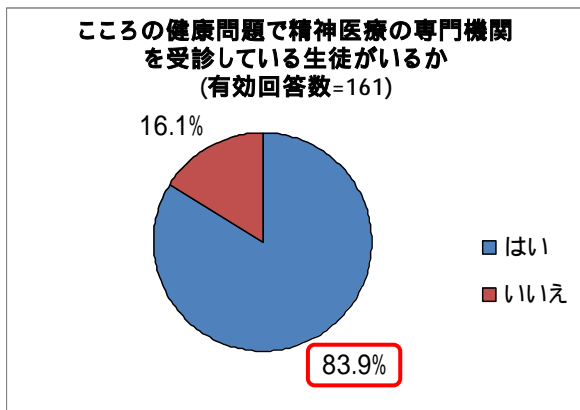
**【中学生のメンタルヘルスの実態】**

こころの健康状態に問題を持つ生徒がいると回答した中学校は全体の98.7%



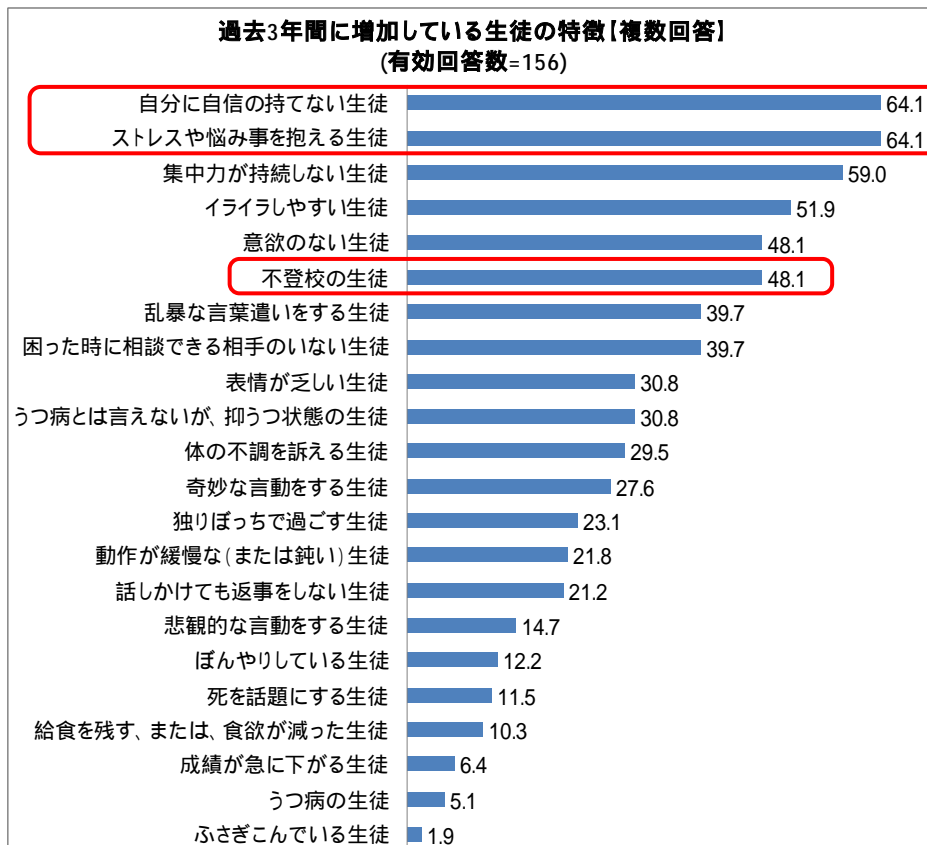
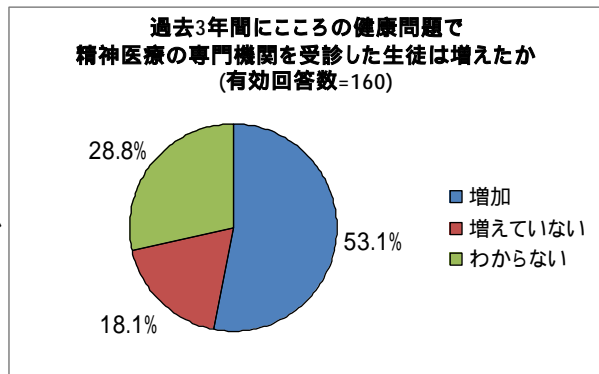
精神医療専門機関を受診する生徒がいる学校 83.9%、うつ病の生徒がいる学校 37.3%

実際に精神医療専門機関にかかっている生徒がいる中学校は全体の 83.9%、過去3年間に「うつ病」と診断されている生徒を有する中学校は 37.3%でした。



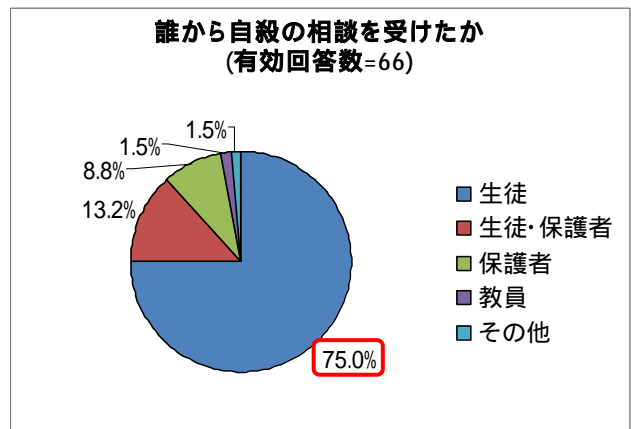
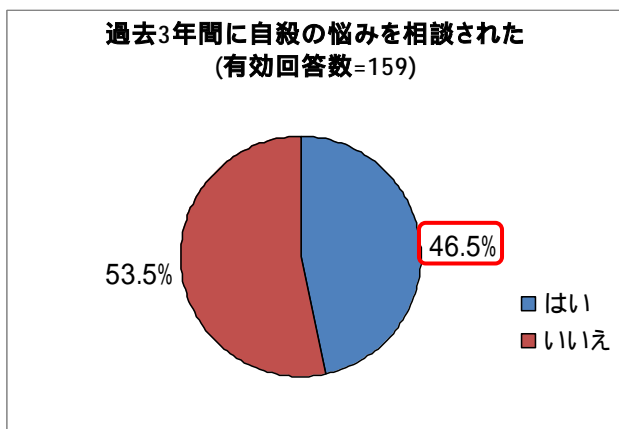
半数以上(53.1%)の学校で、心の健康状態に問題を持つ生徒が「増えている」

心の健康状態について、過半数を超える53.1%の教師が、過去3年間で何らかの問題を持つ生徒が「増えている」と回答しました。またその内訳は、「自分に自信がもてない」と「ストレスや悩み事を抱える生徒」が最多の64.1%となり、また、半数近くの教師が、「不登校の生徒が増えている」と感じていました。



半数近く(46.5%)の回答者が「過去3年間に自殺の悩みを相談された」経験がある。

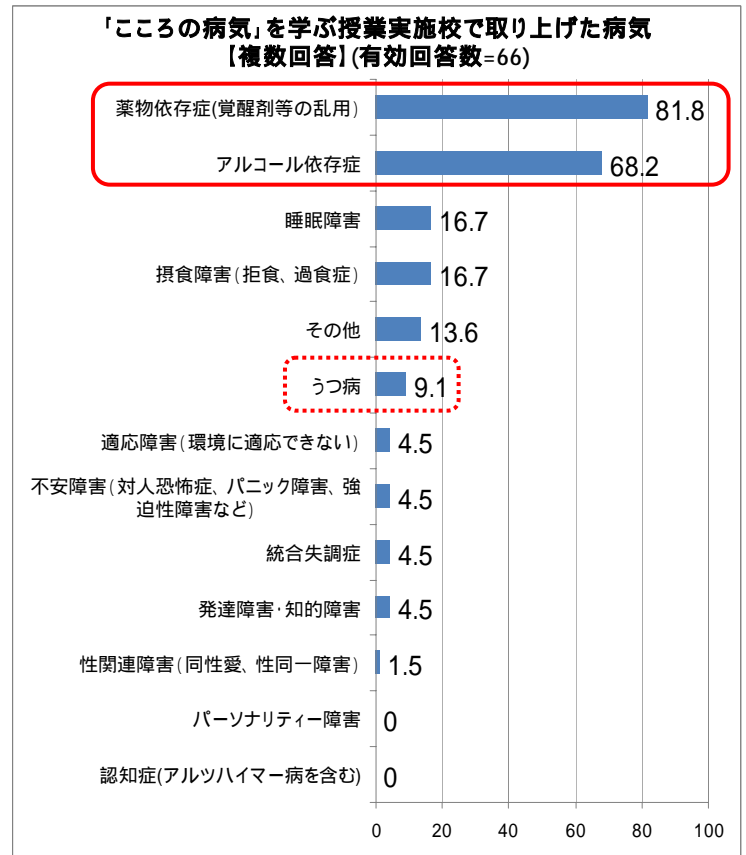
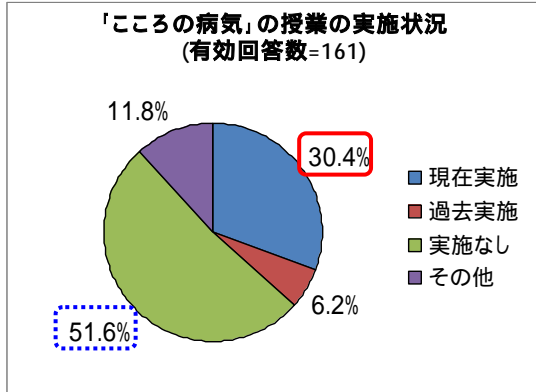
過去3年間に自殺の悩みを相談された経験について、半数近くの46.5%が「はい」と回答、また、相談を受けた相手の約8割は「生徒」自身からによるものでした。



## 【「こころの病気を学ぶ授業」実施状況】

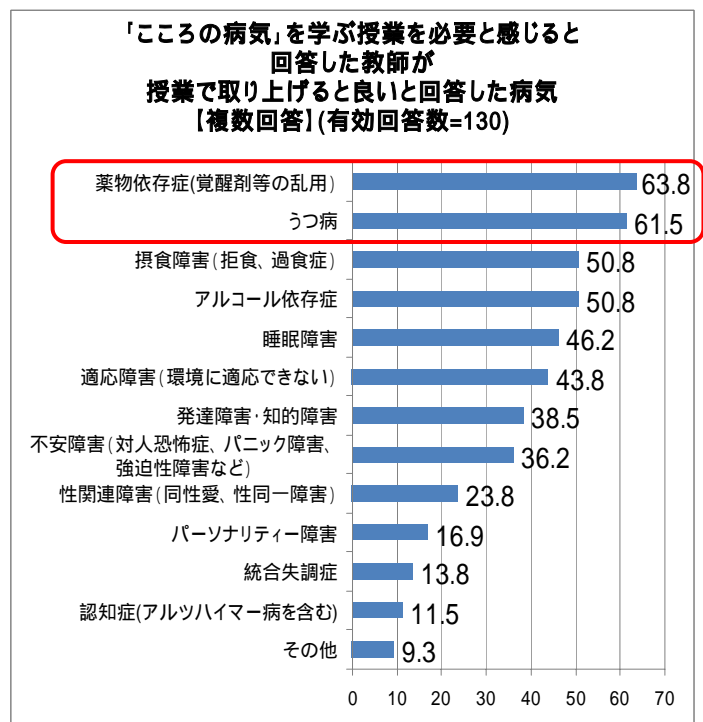
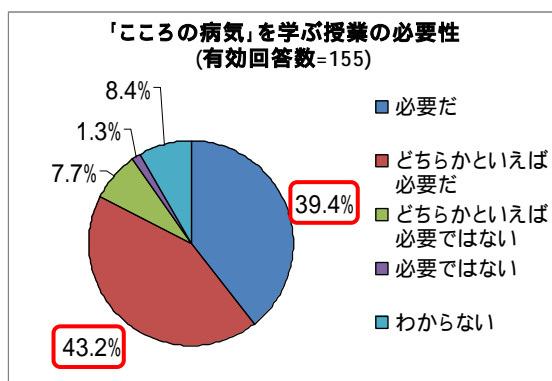
「こころの病気」を扱う授業を実施している学校は3割(30.4%)にとどまる

こころの病気を学ぶ授業について、「現在、実施している」のは30.4%に留まり、半数を超える51.6%は「一度も実施していない」現状が明らかとなりました。また実施されている心の病気の授業内容の多くは「薬物依存症」、「アルコール依存症」でした。



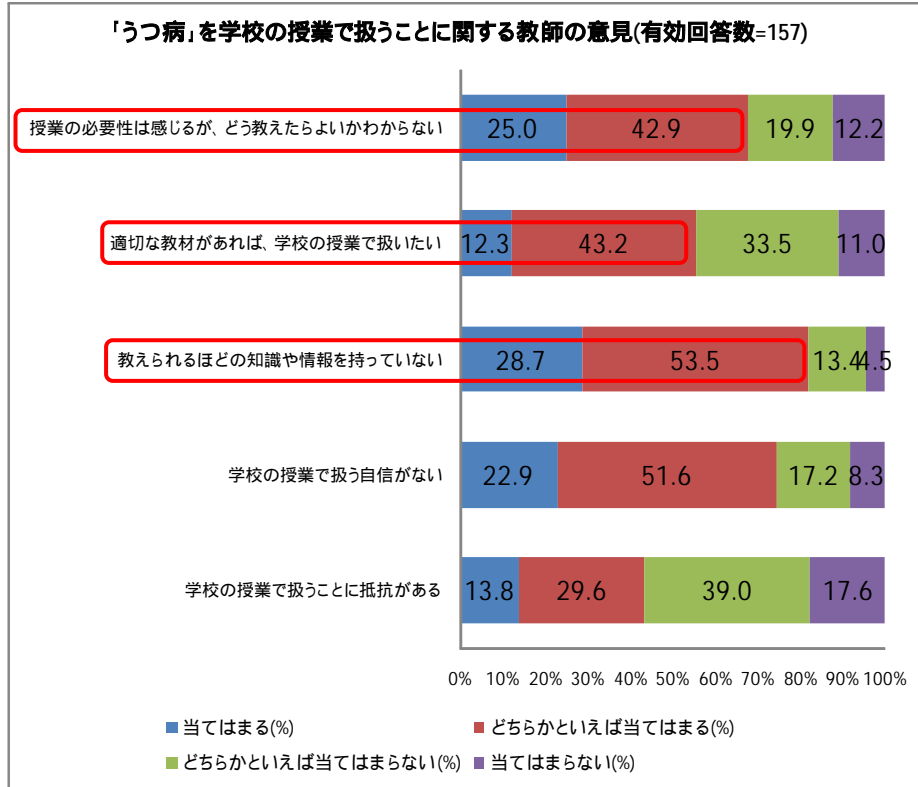
8割以上(82.6%)が「こころの病気を」学校の授業で扱う必要性を認識。

こころの病気を学ぶ授業について、「必要」、「どちらかといえば必要」を合わせた82.6%の教師が実施の必要性を感じています。これらの教師が取り上げるとよい回答したテーマとしては薬物依存症、うつ病の2つのニーズが高いことがわかります。



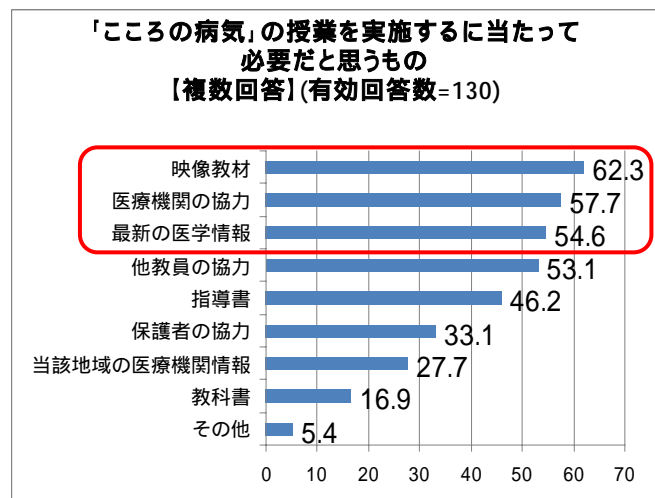
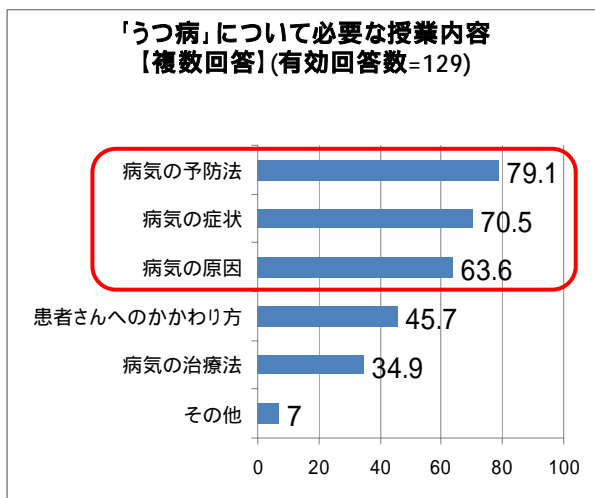
うつ病について「教える知識や情報ない」、「どう教えたらよいかわからない」

「うつ病」を授業で扱うことについて、「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」を足して最も多かった回答は「教えられるほどの知識や情報がない(82.2%)」で、「授業の必要性は感じるが、どう教えたらよいかわからない」という人が 67.9%、「適切な教材があれば扱いたい」と回答した人も 55.5%いました。



うつ病授業、取り上げたい内容は「予防法」、授業に必要なものは「映像教材」など

「うつ病」の授業を実施する場合、必要な授業内容は「予防法(79.1%)」、「症状(70.5%)」、「原因(63.6%)」と続き、また、授業の実施には「映像教材(62.3%)」や「医療機関の協力(57.7%)」、「医学情報(54.6%)」などが必要であると感じていました。



以上